

<日本・アジアのキリスト教> (演習・Seminar)

A: 日程・場所

演習日(前期): 4/14, 21, 28, 5/12, 19, 26, 6/2, 9, 16, 23, 30, 7/7, 14

場所: キリスト教学研究室(新館8階、811号室)

B: テキスト

・波多野精一 『波多野精一全集1、2』 岩波書店

C: 演習の意図・目標

・日本・アジアのキリスト教研究に向けて

- ①東北アジア(朝鮮半島・日本・中国・台湾)のキリスト教
- ②宣教師サイドからの視点との統合
- ③アジアにおける新しいキリスト教形成の可能性
- ④アジアの固有の課題とキリスト教(アジアの近代史のコンテキストにおいて)
- ⑤フィールド・ワークにおける研究方法の確立
- ⑥共同研究の実施

・日本キリスト教思想研究: 近代日本とキリスト教思想との相互連関を中心に

1. 2001年度の矢内原忠雄、2002年度の内村鑑三に続いて
2. 近代日本(天皇制・民族主義)とキリスト教
3. 明治期の日本キリスト教における神学の受容と形成
新神学論争、植村・海老名論争
4. 2005年度から、植村正久と日本のキリスト教的宗教哲学(学問的キリスト教思想)の系譜
とくに、2006, 2007年度は、植村正久とその思想的展開(高倉徳太郎)

・研究会との相互関係: 研究拠点の形成に向けて

「アジアと宗教的多元性」研究会(現代キリスト教思想研究会)

『アジア・キリスト教・多元性』創刊号～第6号。

『比較宗教学への招待－東アジアの視点から－』晃洋書房 2006年

D: 研究の現状

- ①通史の試み
- ②個別教派・教団・教会の歴史編纂
- ③宣教師の伝記・書簡・公式の報告書
- ④人物研究(内村、新島、海老名、新渡戸、植村など)
- ⑤新聞・機関誌などの基礎資料の整備
全体的に、日本キリスト教思想研究が、各地の研究グループレベルの議論を超えた、キリスト教研究としてまだ確立していない。

E:波多野精一

1. 『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局)より

波多野精一 (1877.7.21 ~ 1950.1.17、明治 10 ~ 昭和 25)

宗教哲学者、長野県 (松本町) に生まれる。

第 1 高等学校から東京帝国大学文科大学哲学科へ、大学院で R.ケーベルに学ぶ。

1900 年、東京専門学校 (現在の早稲田大学) 講師となり、西洋哲学史を講義。04 年より、ベルリン、ハイデルベルク大学に学び、ハルナック、ヴィンデルバンドらに師事。帰国後、東京帝国大学で原始キリスト教を講義

1917 年京都帝国大学教授となり宗教学講座を担当。47 年に玉川学園大学教授に招聘。

『宗教哲学』(1935)、『宗教哲学序論』(1940)、『時と永遠』(1943)

2. 『京都大学百年史／部局史編1』第2章より

波多野精一(1877~1950)が大正6(1917)年12月に宗教学講座に着任

キリスト教の学術的研究のため寄付された渡辺荘奨学資金により、大正11(1922)年5月本講座が宗教学第2講座として設置され、波多野がこの講座を兼担することになった。波多野は、原始キリスト教、パウロおよびヨハネの宗教思想、宗教思想史等について講じ、退官後発表された『時と永遠』(1943年)のような、キリスト教の立場に基づく宗教哲学をも構想しつつあった。波多野の厳密なテキスト読解と深い宗教哲学的思索とが、本講座の礎石を据えたといつてよい。

波多野は、昭和2(1927)年、本講座の兼担を解かれて分担となったが、昭和12(1937)年3月には宗教学第1講座から本講座の担任者となり(第1講座を分担)、本講座は初めて専任教授を持つことになった。しかし同年7月に波多野は停年退官し、昭和23(1948)年まで講座担任者のいない状態が続くことになった。

3. 植村より見た、近代日本のキリスト教思想形成の系譜

植村 → 高倉 → 東京神学大学の組織神学の伝統

→ 波多野精一、キリスト教的宗教哲学

cf. 内村鑑三と無教会の系譜

F:ゼミの進め方

- ・次回4/21は、「アジアのキリスト教」研究について講義を行い、次回からの担当を決定する。
- ・4/28は、石原謙他『宗教と哲学の根本にあるもの』(岩波書店、1954年)より、石原謙「序説 生涯と学業」を扱う。
- ・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し(テキスト外の資料などを合わせて用いる)、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする(次回の冒頭で報告する)。
- ・必要な解説を行う(芦名)。
- ・成績はゼミでの発表によって評価し、夏期休暇の間にレポート作成してもらおう。

G: 文献

より包括的な文献表としては、次のWebを参照。

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub8d.htm>

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub9a1.htm>

Barrett, Kurian, Johnson (eds.), *World Christian Encyclopedia*. vol.1-2, second edition
Oxford University Press 2001

Scott W.Sunquist (ed.), *A Dictionary of Asian Christianity*, Eerdmans Publishing 2001

国際基督教大学・アジア文化研究所編 『アジアにおけるキリスト教比較表』(創文社)

日本基督教団出版局編 『アジア・キリスト教の歴史』(日本基督教団出版局)

富坂キリスト教センター 『鼓動する東アジアのキリスト教』(新教出版社)

鶴沼裕子 『史料による日本キリスト教史』(聖学院大学出版会)

隅谷三喜男 『日本プロテスタント史論』(新教出版社)

『近代日本の形成とキリスト教』(新教出版社)

出口光朔 『近代日本キリスト教の光と影』(教文館)

土肥昭夫 『日本プロテスタント・キリスト教史』(新教出版社)

『歴史の証言 日本プロテスタント・キリスト教史より』(教文館)

海老沢有道・大内三郎 『日本キリスト教史』(日本基督教団出版局)

中央大学人文科学研究所 『近代日本の形成と宗教問題』中央大学出版部

高橋昌郎 『明治のキリスト教』吉川弘文館

古屋安雄・大木英夫 『日本の神学』(ヨルダン社)

武田清子 『土着と背教 伝統的エトスとプロテスタント』(新教出版社)

古屋安雄他 『日本神学史』(ヨルダン社)

石田慶和 『日本の宗教哲学』(創文社)

(植村、内村、波多野)

近藤勝彦 『デモクラシーの神学思想 自由の伝統とプロテスタンティズム』(教文館)

(植村、内村、海老名、吉野作造、南原繁)

佐藤敏夫 『植村正久』(新教出版社)

大内三郎 『植村正久 生涯と思想』(日本キリスト教団出版局)

武田清子 『植村正久 その思想史的考察』(教文館)

森岡清美 『明治キリスト教会形成の社会史』(東京大学出版会)

森本あんり 『アジア神学講義』(創文社)

芦名定道 「日本の宗教状況と宗教間対話の可能性」、*Journal of the Institute of Asian Area Studies*, 釜山外国語大学 アジア地域研究所 2004年、1-18頁

「東アジアの宗教状況とキリスト教一家族という視点から」、

『アジア・キリスト教・多元性』創刊号 現代キリスト教思想研究会

2003年、1-17頁

芦名定道・金文吉「死者儀礼から見た宗教的多元性—日本と韓国におけるキリスト教の比較より—」、『人文知の新たな総合に向けて(21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」)』第二回報告書Ⅲ〔哲学篇2〕 2004年、5-23頁

「アジア・キリスト教研究に向けて(1)」、

『アジア・キリスト教・多元性』第3号 現代キリスト教思想研究会 2005年、71-88頁

「アジア・キリスト教研究に向けて(2)」、

『アジア・キリスト教・多元性』第4号 現代キリスト教思想研究会 2006年、43-62頁

「植村正久とキリスト教弁証論の課題」、

『アジア・キリスト教・多元性』第5号 現代キリスト教思想研究会 2007年、1-頁

原口尚彰 「日本新約聖書学史における波多野精一」『キリスト教史学』(キリスト教史学会) 第60集、2006年、87-102頁。

村松 晋 「波多野精一と敗戦」『聖学院大学論叢』第19巻第1号、2006年、63-72頁。

「波多野精一の時代認識」『聖学院大学論叢』第19巻第2号、2007年、140-146頁。

佐藤啓介 「愛ゆえに、我在り——田辺、波多野、マリオンと存在—愛—論」片柳栄一編『ディアロゴス——手探りの中の対話』晃洋書房、2007年、216-236頁。

「波多野精一の存在—愛—論」『日本の神学』(日本基督教学会)46、2007年、31-52頁。